

共同研究 ● 現代「手芸」文化に関する研究 (2014-2017 年度)

研究の目的

本共同研究のテーマは、研究代表者である上羽陽子（国立民族学博物館、以下民博）の調査地インドでの経験によって生じた3つの疑問が起因となっている。手芸とはいったいなんなのだろうか。芸術、美術、工芸との関係はどのようになっているのだろうか。刺繍やアップリケ、編み物などをひとまとめとする日本の手芸の概念は、世界中にみられるものなのだろうか。本研究は多分野・多地域の研究者によって、これらの疑問にアプローチするものである。

手芸とは、手先の技術および、それによる制作活動をさし、主として糸、布をもちいて、家庭内の実用品・装飾品などをつくる手仕事の総称とされる。日本においては、おもに女性を担い手とする家庭内での、商業化されていない趣味的な制作を意味する概念として、明治期に形成された（山崎 2005）。

これまでの手芸をめぐる研究は、刺繍技術や編み技術など、技術の歴史に焦点をあてるような、家政学的研究が中心であった。しかし現在、世界各地で、従来の日本の手芸概念ではとらえられない余暇的・趣味的仕事が、多様な展開をみせている。それらは男性も担い手に含み、アート、フェアトレード商品、エスニック雑貨などとして、美術市場や商品市場の領域にも進出している。また、手芸的活動は、趣味を通じた人的ネットワークの形成や、災害後におけるケアや癒しとしての機能があるとして注目を集めている。

本研究では明治期に形成された、狭い手芸概念の枠組みをこえた余暇的・趣味的仕事のひろがりや、学問の対象として汲み上げ、現代社会における意義を通文化的に提示したいと考えている。

共同研究のすすめ方

この共同研究は、日本、アジア、ヨーロッパ、アメリカ、オセアニアなどを専門地域とする文化人類学、社会人類学、民族芸術学、教育学、社会学、経済学、美学・芸術学、服飾史の研究者で構成されている。さらに、造形制作の現場にたずさわっている、繊維造形作家、工芸教育者、美術館学芸員も共同研究員に加え、世界各地を対象とした、分野横断的で学際的な比較研究が可能な研究体制となっている。

研究会は、2014年11月から開始し、これまですでに6回開催した。初回の研究会では、上羽が共同研究の着想およびめざすところについて報告をし、全員で認識の共有をおこ

なった。さらに明治期に形成された日本の手芸について、山崎明子（奈良女子大学）が発表をおこなった。山崎の発表では、手芸を近代的ジェンダー規範に関わる問題として位置づけ、手芸の概念形成と、それが女性の役割としてジェンダー化されるプロセスという、重要な論点のがべられた。現在ひろく趣味として消費される手芸の担い手が、女性である大きな特徴の背景に、近代において女性と手芸が強く関係づけられてきた歴史があることを提示した。

また、初回では共同研究員各自の活動や研究について情報共有した。そして2回目以降、本研究の問題を分析するにあたって、重要なテーマとなりうる「消費者動向」、「だれがつくるのか」、「造形教育」、「アイデンティティ」、「社会制度」、「ケアとネットワーク」といった項目をたてて、発表をおこなう方針を固めた。

テーマ発表からみえてきた論点

研究会の2回目には、笠井みぎわ（総合研究大学院大学・ゲストスピーカー）、山崎、坂田博美（富山大学）が「消費者動向」をテーマに発表した。笠井は、日本聖公会の教会刺繍における信仰と刺繍作業との関係性について論じ、刺繍をする行為自体に価値があることを報告した。山崎は、戦後におこる手芸ブームをとりあげ、日本手芸普及協会の変遷や、団地で生活する専業主婦が、手芸を消費する重要な存在であることを報告した。坂田はキルトショップにおける店主と顧客との関係を、経

済学の視点から報告し、約20万人を動員するともいわれる東京国際キルトフェスティバルや教室ビジネスを事例に、小売業者の存続メカニズムについて論じた。これらの発表により、手芸的なものがうまれる社会や空間、そしてそれが機能する空間や社会を意識的に考える必要性が指摘された。

3回目には、村松美賀子（京都造形芸術大学）、齋藤玲子（民博）、中谷文美（岡山大学）が「だれがつくるのか」をテーマに発表した。村松は日本各地のクラフトフェアを事例に、つくる側と使う側が、直接出会う場づくりの重要性を指摘するとともに、良いつくり手とはなにかを論じた。齋藤はアイヌ女性の手仕事の歴史の変遷と、継承のあり方について報告し、手仕事に対する評価が、つくったもの自体だけではなく、だれがつくり手かといった点が重要視されることを提示した。中谷は「手芸とはなにか」について、主婦と職人、自家消費と市場向けといった二項対立だけではとらえきれな



札幌駅西コンコースにアイヌアートモニュメントとして展示されているタバストリー。加藤町子 2014年作「コタノツタ シノッヘカッター村で遊ぶ子供達」(2015年、齋藤玲子撮影)。

い、現代の手芸的活動を報告した。これらの発表から、つくり手のジェンダーや社会的属性によって「つくられたものへの評価」と「つくり手への評価」がかならずしも一致しないといった興味深い論点があられた。

4 回目には、野田涼美（京都造形芸術大学）、ひろいのぶこ（京都市立芸術大学）、上羽が「造形教育」をテーマに発表した。野田は自身の幅ひろい制

作活動を事例にあげ、他者がどのように手芸的造形物をとらえているかについて報告した。ひろいは長年の造形教育の変遷を報告し、糸と布の素材性が手芸的造形活動とどのように関連するかについて論じた。上羽は学部時代の経験を中心に、大学における手芸的造形物への偏った視点について報告をした。これらの発表からは、それぞれの制作の現場においては、既存のアート・芸術・美術・工芸・手芸という分類では線引きをすることのできない多様な造形活動・造形物があることが提示された。

5 回目には、新本万里子（広島大学）、宮脇千絵（南山大学）、平芳裕子（神戸大学）が「アイデンティティ」をテーマに発表した。新本はパプアニューギニアのアベラム社会の女性の網袋の揚げ方をめぐる言説について報告し、その揚げ方がいかにアイデンティティを表象しているかについて論じた。宮脇は中国雲南省のモン女性の刺繍を中心に、民族衣装における手芸的装飾の役割と、女性たちが出稼ぎ中に行う仕事以外の刺繍制作をとりあげ、労働とは異なる、慰めとしての刺繍があることを示唆した。平芳は女性の針仕事について、19 世紀半ばのアメリカの雑誌を事例に、刺繍と裁縫をめぐる言説から、同じ針仕事であっても教養としての刺繍の存在と、仕事としての裁縫の存在との違いを提示した。これらの発表からは、一見同じような針仕事に見える刺繍や裁縫が、アイデンティティの構築や、女性にとって好ましい仕事といった視点からみると、それらの役割には大きな差異があることが明らかとなった。

6 回目は、木田拓也の所属する東京国立近代美術館で開催した。これまでのべてきたように、本研究の目的のひとつは、狭い手芸概念の枠組みをこえ、手芸を学問の対象とした新たな研究領域を開拓することにある。そのため、既存の研究で基礎的専門用語として確立されている、美術や工芸の枠組みを再考する必要がある。そこで6 回目の研究会は、木田が展示を担当した東京国立近代美術館の「ようこそ日本・アジア—1920 年 -30 年のツーリズムとオリエンタル・イメージ」と、東京国立近代美術館工芸館「1920～2010 年代所蔵工芸品にみる未来へつづく美生活展」を、木田による同美術館・工芸館の成り立ちや、収集活動の解説を聞きながら、共同研究員それぞれの視点で観察した。その結果、手芸的造形物が美術館や工芸館から、いかに抜け落ちているかという事実が明らかとなった。

そして、その事実をふまえながら「社会制度」に焦点をあて、木田、蘆田裕史（京都精華大学）、南真木人（民博）、金谷美和（民博）が発表した。木田は近代日本における工芸概



19 世紀アメリカの女性誌 "Godey's Lady's Book" (1853 年) より。刺繍上手でおしゃれ好きのレディとぼろ切れを縫うお針子の姿が対照的に描かれる (キャプション、平芳裕子)。

念の変遷について、概念が形成された明治期から工芸館開館の 1977 年までを報告した。蘆田は近現代美術におけるファッションの意味について、衣服と身体、ファッションと手芸との関係から論じた。南はカースト社会におけるものづくりに焦点をあて、ネパールにおける造形物を手工芸、美術、手芸的なものに分類をして報告した。金谷はインドの行政用語としてうま

れた handicraft の概念の変化について論じた。これらの発表からは、近代国家の形成期において、美術や工芸、手工芸といった概念がいかに戦略的にうみだされたかが提示された。また、手芸的制作活動や手芸的造形物がうまれやすい土壌と、うまれにくい土壌とがあり、それぞれの社会・文化的背景を鑑みながら、今後の議論をすすめてゆく必要性が明らかとなった。

今後の指針

これまでの具体的な事例をもとにした発表によって、狭い手芸概念の枠組みをこえた、現代の余暇的・趣味的仕事をとらえる上で3 つの重要な視点が導きだされた。1 つ目は、手芸的なものがうまれる社会や空間というものが存在すると同時に、それらが機能する空間や社会があるということである。2 つ目は、つくり手がだれであるか、そしてそのつくり手のアイデンティティの問題である。手芸的手仕事への評価は、造形物自体への評価以上に、つくり手のジェンダーや社会的属性によって、評価が異なるということである。そしてこの問題の背景には、手芸に関する批評の不在や、家庭内から発信することのできるブログやインターネット販売といったメディアの変化も関係していることが明らかとなった。3 つ目は、手芸的技術の問題である。手芸的技術の特徴は、技術教授が比較的容易であり、基礎的手作業によってつくりあげることができるものが多い。このような手作業が、造形教育においてどのようにとらえられてきたのか注目する必要がある。そして手芸的手仕事がどのような文脈の接合によって、現代アート作品へ転換するのかについても視点をひろげて議論をする必要性がみえてきた。

今後は、このような論点を加味し、シンポジウム形式によるさらなる議論の深化を試み、既存の家政学的研究の分野をこえた、包括的なアプローチを可能にする基礎的概念の創出をめざしたいと考えている。

【参考文献】

山崎明子 2005 「近代日本の「手芸」とジェンダー」世織書房。

うえば ようこ

国立民族学博物館文化資源研究センター准教授。専門は民族芸術学・染織研究。インドの刺繍や女神儀礼用染色布などを中心とした手仕事について研究している。

著書に『インド・ラバーリー社会の染織と儀礼—ラクダとともに生きる人びと』（昭和堂 2006 年）、『インド染織の現場—つくり手たちに学ぶ（フィールドワーク選書⑩）』（臨川書店 2015 年）など。